

## 出雲の医家大森泰輔の人間観と学問観

田 中 則 雄

### 摘 要

近世後期、出雲国母里藩の医家である大森泰輔は、自作の漢詩の中で、人間の尊さについて詠んでいる。この思想は、心学者でもあった彼が、朱子学の論理に基づきつつ到達したものであった。

キーワード…心学、朱子学、華岡青洲

### はじめに

大森泰輔は、明和八年（一七七二）、出雲国母里藩士の次男として出生した。六十歳を過ぎた天保四年、同五年（一八三三、三四）の二度にわたり、紀州の華岡青洲の塾へ赴いて当時最先端の医学を学んで出雲へ帰り、安政四年（一八五七）、八十七歳で没した。その著述と旧蔵書は、島根大学附属図書館医学分館大森文庫として伝存する。泰輔の事績、特に華岡塾での学びとそれに依拠しての医療活動に関しては、梶谷光弘による詳細な研究が備わり、その最新の成果は梶谷（2008）に収録される。筆者は、泰輔において、医学を中心とする理科系の学問と、一方で彼が努力した文科系の学問との間に統合が見られることについて論じた（田中2008a）。論旨を要約すると、以下のようになる。

- 一、大森文庫に残る泰輔の著述、旧蔵書は多岐にわたり、医学書のみならず文学・思想・歴史など文科系の書物が多いことは特に注目に値する。
- 二、華岡流の最先端の医学を学んで帰国したが、公的に就いた地位は母里藩の心学教訓であった。ただし本人はこれを光栄と受けとめた。
- 三、泰輔においては、心学に由来する論理が、理科系・文科系の諸学問にわたり思考の拠り所となっていた。
- 四、心学の創始者石田梅岩は、個々人の内面の存養（日常生活や労働の場での倫理活動によって心を磨くこと）を重視したが、その後の心学においては、孝行、勤勉、儉約のごとき日常道徳の具体的な実践の方に重きを置く傾向が強くなる。この点で言えば、泰輔の心学は、梅岩の考え方に近い。
- 五、泰輔の心学思想は、梅岩と同様に朱子学を基盤に置いている。ただ

し梅岩以上に、朱子学の「性即理」説、「窮理」説を重視している。

泰輔は「性即理」説によって、人間は本来自然界に由来する存在であり、人間と自然とは連続しているという思考を手に入れた。また「窮理」説によって、人間はあらゆる物事の真理を探究すべきである（自然、人間、社会全てが学問の対象である）という思考と態度とを手に入れた。

六、泰輔は自作の漢詩の中で、人間の生命の尊さについて語っていた。この思想を根底に置くことで、医学を中心とする理科的探究と、心理学を中心とする文科的探究とは、共に人間を成長させ、また人間のために寄与する営みとして捉えられ、一つに統合されていたのである。

このように泰輔における文理統合の有り様を把握したのであるが、特に最後の六に関連して、泰輔がこの、人間を重んずる思想に辿り着いた経緯について考察することが課題として残された。本稿ではこの点について、泰輔の著『道話雑記』をその後改めて調査した結果見出された事柄を中心に掲げながら、私見を述べたいと思う。『道話雑記』は、泰輔が母里藩から心学教訓に任せられた天保八年（一八三七）十月以降、同十年三月に至るまでの間に記述した心学講義のノートと見られるものである。

なお『道話雑記』全六冊のうち、泰輔の基本的見解が頻出する「天」「地」二冊の画像を収録し、解題を付したCDを作成した（田中2008b）。随所に施された書き入れなど、講義ノートとしての実態を窺うには、こちらを参照されたい。

## 一 大森泰輔における「性即理」説

泰輔の心学への傾倒は十代の頃に始まり、終生続く。以下、梶谷（2003）所収の年譜によって掲げる。まず十五歳の頃、心学者手島堵庵の門人であった三嶋庄吉という人物から心学を学んだ。また京都の佐々木丹後という人物とは二十五歳の時に出会い、後に六十三歳の天保四年（一八三三）、第一回の華岡塾留学へ向かう途中、京都に立ち寄って再会し、教えを受けている。さらに翌天保五年、第二回の華岡塾留学中のこと、大坂にある華岡の分塾へ行った折、樹下先生なる心学者に教えを受けている。私見では、この樹下先生とは、樹下宇右衛門（生年未詳、天保十一年（一八四〇）没。名は恂、樹下翁と号す）と見なしてよいと考える。大坂の心学者で、『心の行衛』『古今道之栞』などを著した人物である（『国書人名辞典』第七巻に立項される）。

泰輔は心学者として、単に先人の説を人に講ずるのではなく、自身の理論の構築に努力を続けた。その際彼が拠り所としたのは朱子学の「性即理」説であった。朱子学の「性即理」説、およびそれに基づく修養の説とは、おおよそ以下のようなものである（田中（2008a）においても触れたが、改めて掲げる）。

万物には「理」が備わっており、人間も例外ではない。人間は生まれる時、天から「理」を賦与され、それが内面（心）に宿っており、「性」と呼ばれる（＝性は即ち理である）。

さてこの「性」は本来優れた善なるものであるが、実際には欲望などによって曇らされている。そこで「居敬」という、内面を磨く修養が必要となる。ただしこれだけでは主観に陥る危険があるので、外面的客観的な修養を併行させなければならない。

「理」は、天体や動植物、さらには社会的現象に至るまで、宇宙の万物に備わっており、これを探究して突き詰めて行くと、最終的には、根源究極の「理」（太極）に到達する。こうして個々の事物の「理」から根源究極の「理」（太極）へと到達すべく窮めて行く営みのことを「窮理」という。これがもう一つの不可欠な修養である。「窮理」は今日という学問的探究と重なる部分が大きいが、あくまでも探究の結果、その人間の人格が成長向上すると考えられている点において、修養と位置づけられているのである。

泰輔はこの「性即理」説を、どのように理解していたのであろうか。『道話雑記』の「理学の奥義」という項に次のように述べている。なお理学とは、朱子学のことを言う。

心は虚にして天也。形はふさがつて地也。呼吸は陰陽也。これを継者は善也。用をなす処を主る。体は性也。是を以て見よ。人は一箇の小天地也。我も一箇の天地と知らば、何に不足の有るべきや。

泰輔はおおよそ次のようなことを言おうとしていると考えられる。彼はここで、「体」（根源的、本質的なもの）と「用」（具体的、個別的なもの）という捉え方を基盤に置いている。「天—地」というのは、天空と地上というような単純な意味ではなく、それぞれ「体—用」に対応して、「天」はこの宇宙における根源的なもの、「地」は、この「天」に基づいて存在している物質、物体、現象などのことを指すと解される。

かくして人間は、「心」と「形」（身体のことと解される）から成り立っているといえる。「心」は虚であって、大きさ、色、形態などを持たない。一方「形」（身体）は「ふさがつて」いる、つまり物質が詰まっています。

出雲の医家大森泰輔の人間観と学問観（田中則雄）

大きさ、色、形態などがある。「天地」との関係で言えば、「心」は「天」に、「形」（身体）は「地」に対応する。これは前掲した朱子学の、人間は生まれる時に天から理（≡性）を賦与され心に宿しているという説とも合致する。

「呼吸は陰陽也」、即ち呼吸は自然の作用として起こるものである。人間はこのことによつて、「用をなす処を主る」、身体の具体的な機能を保つのである。さてここで「これを継者は善也」、人間は自然界から善なるものを受け継ぐと言う。留意すべきは、自然と人間との連続を、生物学的にのみ捉えるのではなく、そこに道徳的観点を融合させている点である。

「体は性なり」とは、「体—用」の「体」に該当するのは「心」、特にその核をなす「性」であるという意である。この考え方も、人間が天から賦与された性は本来善なるものであるとする朱子学説と合致する。

以上のようなことを踏まえて、「人は一箇の小天地」という認識に辿り着く。図式化すると次のようになる。

天——地  
【呼吸】  
心「性」——形（身体）  
体——用

なお右の一節で呼吸のことに触れていたが、これについて『道話雑記』の「万物一体」の項では次のように言う。

天地万物人我一体と云証拠は、人の呼吸にて知るべし。呼吸は直に

天地の陰陽也。

人間の呼吸も自然現象であると捉えることにより、人間が、大きな自然界と連続しながらその一部として存在していることを言おうとしている。

ここで前掲拙稿にも引用したが、泰輔の詩文集『不明妄作』に収める、天保三年（一八三二）六月十四日に記したとする「無常 辞世」の詩を参照する。

吾が身未だ生ぜざる前は則ち吾が心天に在り。

吾が身既に生ずるの後は則ち天吾が心に在り。

吾が身死するときは則ち心元の天に帰るのみ。

これは「性即理」の論理そのものである。大切なのは、ここで泰輔の意識が「吾が心」に向けられていることである。単に自然と人間とは繋がっているとして述べているのではなく、自分の内面（心）に思いを遣り、これが天から賦与された（自然界からもたらされた）ものであると観じているのである。このような態度は自ずと、ではそのような心の本質とは一体何であるかという問いへと、彼を導いて行つたと思われる。

## 二 孝弟の説

泰輔は、人間と自然界とは連続していて、人間の心は自然界からもたらされたものであるという思考を大前提に置きながら、そのような心の本質とは何であるかと考えて行つた。先に掲げた『道話雑記』「理学の奥義」の項、その後続部分に、次のように言う。

平日孝弟にして五常の道を離れざれば、天理の本性に合すと言ふべし。然ば天と我と一体也。是即ち小天地也。是に過たる楽しみあるべからず。

平素から「孝弟」にして五常（仁義礼智信）を離れないなら、天理の本性（人が天から賦与された理（性））に合致すると言う。言葉の元来の意味からすれば、「孝」とは、子が親に仕え尽くすこと、「弟」（悌とも書く）とは、弟が兄に仕え尽くすことである。しかしはたして泰輔が考えているのは、単に上位者に従う心というような平板な意味であろうか。

『道話雑記』にはまた「性は孝弟而已」という項があつて、次のように言う。

性善は一貫の別名にして、孝弟は忠恕の異称と決定すべし。

泰輔が踏まえているのは、『論語』里仁篇の、孔子が「吾が道は一以て之を貫く」と言い、弟子の曾子が、「夫子の道は忠恕のみ」と答えたという有名な一節である。孔子の道にはこれを貫く一なる根本があつて、それは即ち忠恕であると述べたものである。泰輔はここで「性善」、即ち前節で見たような、人間が天から賦与された善なる性が、この一なる根本である「忠恕」に該当すると言う。そして「孝弟」こそがその「忠恕」に該当すると解する。これを整理すれば次のようになる。

善なる性（Ⅰ孔子の道を貫く一なる根本Ⅱ忠恕） Ⅱ 孝弟

要するに、人間の善なる性とは「孝弟」のことであると考えているのである。そしてそれは「忠恕」と同内容であると言う。ここでは一旦、忠恕とは、誠実に人を思い遣ることというほどの意味に解しておいて検討を進める。

続く「同断」という項（即ち、同じく「性は孝弟而已」の項であるとの意）に、次のように言う。

性は即ち天理也。然れば孝弟を離れざるは、天地一体にして、是一箇の小天地なり。

性は天から賦与された理であると言った上で、然れば、人間が「孝弟」を離れることがないのは人間と天地とが一つだからなのだとと言う。泰輔が言いたいのは、「孝弟」は決して教導されて獲得するというようなものではなく、人間生まれながらに備わっているものだという事である。では「孝弟」とは、具体的にどのような心のあり方を言うのであろうか。泰輔は「孝弟」を説明するにあたり、再三にわたって肉親の看病の話を例に挙げる。「石田氏開悟」という項に、心学の祖石田梅岩の話を掲げて言う。

昔石田勘平、母の苦患看病の時、忽然として、堯舜の道は孝弟而已と決定し、豁然と開悟有りし由也。易に、「一陰一陽、之を道と謂ふ。之を継ぐ者は善也。之を成す者は性也」と。孟子の性善に非ずや。

泰輔はここで『易』の繫辞上傳の一節を掲げて、「陰陽がめぐりながら起る自然界の現象の根源にあるのが「道」（この場合「理」と等しい）

出雲の医家大森泰輔の人間観と学問観（田中則雄）

であり、人間はこれを善なるものとして受け継いでいる。これが「性」である」とあるのは、全く『孟子』の性善説と重なるのだ、と説いている。先に第二節に引いた「理学の奥義」の項にも、「呼吸は陰陽也。これを継者は善也」とあった。呼吸は自然界の陰陽のめぐりに他ならないとして、そこに人間と自然界との連続を捉えつつ、人間はその自然界から善なるものを受け継いでいると述べていた。さて右の引用では、石田梅岩の話を掲げる。要するに、この善なるものとは「孝弟」のことであり、それは梅岩が母親の看病中に心の中で捉えたこときものだというのである。

「李勣姉を重んず」の項には、唐の李勣（高祖の臣であった人）が姉を献身的に看病した話を掲げる。

小学に云、唐の李勣と申すは貴き身分の人也。其姉病氣の時、自身に粥を煮るとて、過て我が鬚を焚けり。姉の曰く、「僕女多し。何ゆへ自身に粥を煮て鬚まで焼き玉ふぞや」と。李勣の曰く、「其人なきには非ざれども、今姉の年老たり。吾も亦老たり。若姉卒し給ひて後は、いかに粥を煮てまいらせんと思ふとも、詮なかるべし」と云へり。誠に兄弟の道を厚く守りし人ならずや。

泰輔が最も注目しているのは、李勣が自分の動機を説明している部分であろう。弟は姉に尽くすべしと誰かに教えられたなどというのではない。自ずと湧き出た姉への思いを、天与の性に基づくものと見ているのであると思われる。

「玄宗鬚を焦し玉ふ」の項にも、唐の玄宗に関わる類話を掲げる。

玄宗軍談に云、玄宗皇帝は勝れて仁厚温和に在まして、御連枝五王に御慈愛甚だ深く、大ひなる衾に長き枕を調へ、諸王と共に寝させ給ひ、飲食起居を同ふし玉ひける。或時五王の中、薛王病に染て打臥玉ふに、玄宗嘆かしく思食し、為に自ら薬を煮させ玉ふに、窓の嵐に火気御鬢を焦しけり。近臣驚き救ふ所に、玄宗宣ひけるは、「此薬を飲しめて疾の愈る事だに有らば、我が鬢何ぞ惜むに足らん」と有しが、疾は程なく愈しとなん。

ここで泰輔は、『通俗唐玄宗軍談』（中村昂然作、宝永二年（一七〇五）刊）を参照している。この引用は、彼が言おうとしたことを表現するのに誠に効果的であったと思われる。特に、「大ひなる衾に長き枕を調へ、諸王と共に寝させ給ひ、飲食起居を同ふし玉ひける」とは、玄宗が兄弟の王たちに深い愛情を注いでいたことを、具体的な行為の描写によって読者に伝えるものである。これによって玄宗の薛王に対する看病という行為が、純粹な愛情に基づき自ずと発したものであったこと、やむにやまれぬ思いによるものであったことが端的に表される。

さて泰輔は、「舜帝の忍徳」という項において次のように述べる。

孝といへども、親に孝のみにてはなし。親に孝は申すに及ばず、子をも大切になし、兄弟をも、又は他人までも大切にせねば、誠の孝にはならず。論語にも、「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり」と見へたり。「此の如くならざれば、粟有り」と雖も、吾得而食せん哉」と也。考ふべし。

上位者に向かつてすることかどうかなど、問題にならない。検討してき

たところを踏まえれば、ここで泰輔が言おうとしているのは、人が人を愛おしく思う心情のことと解して、まずは誤りなからう。なお泰輔が引いているのは『論語』顔淵篇の次の一節である。

齊の景公、政を孔子に問ふ。孔子対<sup>こた</sup>へて曰く、「君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり」と。公曰く、「善いかな。信<sup>まこと</sup>に如し君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらずんば、粟<sup>ぞこ</sup>ありと雖も、吾豈に得て諸<sup>た</sup>れを食らはんや」と。

泰輔はこれを次のように解するのであろう。景公による、政の基本とは何であるかという問いに対して、孔子は、君は君として臣を思い、臣は臣として君を思うこと（父子の間についても同様）と答える。景公は、全くその通りであると賛同し、そうでなければ、自分は米があっても喉を通らないと答えた、と。

人が人を愛おしく思う心情は、男女の情愛の根底をもなす。「夫婦の誠」という項に次のような論がある。

或書に云、天地交感して男女を生ず。是を氣化と云。其男女自ら交て種生ず。是を形化と云。此形氣盛にして、氣化漸く衰へたり。然而男は女を思ひ、女は男を思ふ。是自然の理にして、人として此情なき事能はず。其情通じたるを夫婦と云。其中に切なる誠有れば、自然と外に顯る、故色と云。

天地の作用として「氣化」「形化」と進む中で男女が生じ人が生ずるといふ。興味深いのはその次のくだりで、だから男女は互いに相思うのだ

とする。男女間の情愛も、人間が生まれる時に自然の理（「性」と言い換えて可）として賦与されているのだという理解である。その情を互いに通じ合ったものが夫婦であり、そこには切なる誠（極めて強い情愛）があるとすると。そしてまた、

元来夫婦は他人なれども、其親しみ骨肉に増るものは、互の誠を失はざるゆへ也。

とも述べている。

以上のように、泰輔は朱子学の「性即理」説を拠り所としながら、その「性」の本質を、人間生来の、人が人を愛おしく思う心情と捉える見解に到達した。改めて『道話雑記』を通読すれば、この見解は終始一貫しており、母里藩の人々に対する講義も、この思想を伝えることを目指して行われていたことが推測されるのである。

### 三 泰輔の学問観、その人間観との関わり

『道話雑記』の中で泰輔は、学ぶことよって得られる楽しみを力説しているが、そこでもやはり「性即理」説が踏まえられている。「学ばざれば天楽を知らず」の項に以下のように述べている。

人に天地より受得たる太和の元氣あり。是人の生てやはらぎ悦べるいきおひの止まざる者也。是を名て<sup>ナツテ</sup>楽みと云。然ども小人は学ばざれば是を知らず。只人のみ此楽あるに非ず。鳥獸草木も此楽みあり。人私慾にさへられて此楽みを知らざるは、彼鳥獸草木にも劣れり。

出雲の医家大森泰輔の人間観と学問観（田中則雄）

天与の「太和の元氣」なるものを挙げ、それを「人の生てやはらぎ悦べるいきおひの止まざる者」と説明する。人間が自然界から与えられた生きる力のごときものと解し得る。ここで「太和」「やはらぎ」と言うのは、自然界の調和の作用が生命を生み出すと捉えることであろう。ただし人の心は私慾に覆われているので、学ぶことでこれを克服しなければ、この楽しみを感受することはできない。

「本性之楽」の項に言う。

人の心の内に元来此楽あり。私慾に引れざれば、時となく所として楽しからずと云事なし。是本性より流れ出たる楽也。外に求るに非ず。朝な夕な目の前に満たる天地のしわざ、月日の明光、四時のめぐり、折々の景氣、雲烟<sup>カスミ</sup>のたなびける、雪のきよき、花のよそほひ、鳥獸虫魚のしわざ、ことごとく楽に非ずと云ふ事なし。

ここで、この楽しみは己の本性より流れ出たるものであり、外に求めるものではないと言いつつ、様々の自然現象を列挙するので一見分かりづらいが、以下のように解してよいと考える。即ちここでも朱子学の「性即理」の論理が踏まえられている。人間の内面（「心の内」）には、本来天から理が賦与されて性（「本性」）として備わる。ただしこれは私慾によつて曇らされているので把握しにくい。そこで自然界に備わる理を窮めるのである。窮めた末に到達する根源究極の理は、人間に備わる性と同一である（性即理）。かくして窮理の営みによつて、結局のところ己の性を把握することになり、ここに至つて楽しみを感受することができるのである。朱子学の「窮理」説において、探究の結果その人間の人格

が成長向上するとされていたことについては前述したが、泰輔の考え方はこれを踏まえるものである。単に自分の外面にある事象を探究するのみで己の内面に帰結しないような営みは無意味であるということになる。

また「内外の樂を失」の項には、次のように言う。

学ばざれば人は内にある樂を失らず、又外なる樂をむなくす。内外二つながら失へり。

これを肯定の表現で言い換えれば、人は学ぶことによって内面にある樂しみを知り、また同時に外面にある樂しみをも知る、となる。ここで言う「樂」とは、学問の面白さという一般的な意味ではない。あくまでも、学ぶことによって「太和の元氣」を把握し実感することでもたらされる樂しみである。自然界と向き合い探究することで、自然界が自分と与えてくれている生命を把握し実感する時に得られる喜悅のことを言おうとしていると解される。

ここで田中（2008a）にも引いた『不明妄作』所収「人間を重んず」の詩を掲げる。

日は是れ太陽の精　　月は又太陰の精  
人は其の両精を合す　　何ぞ過て此身を軽んぜん

泰輔が詠もうとしているのは、宇宙の最も純粋な精髓を賦与されて生まれた人間の尊さということであろう。ではなぜ人は尊いと言えるのか。見てきたような人間観、学問観を重ね合わせて考えると、以下のよう

なるであろう。人間は生まれる時、宇宙から「孝弟」を授かる。これは、自ずと人を愛おしいと思う心のことである。人間はまた、学ぶことを積んだならば、「太和の元氣」、自然界が与えてくれた生命の力を把握し実感することができる。この「孝弟」と「太和の元氣」が、人間の内面に備わる「性」の中身である。そしてこの「性」は、人間が生まれる時に賦与された宇宙の精髓そのものである。かくして人間は尊重されるべき存在であるということになる。

泰輔の人間観と学問観とは、このようにして「性即理」説に立脚して築かれたものであったと考える。泰輔はこのような思想に突き動かされつつ、心学と医学とを、共に人を愛し生かすための営みと信じて、これに尽力し続けたのであったと思われるのである。

〔付記〕 引用に際して、底本における漢文の部分は読み下した。適宜濁点を施し、また明らかな誤記は訂正した。ルビは読解に不便のないものは省略した。句読点は新たに施した。傍点、傍線は全て引用者による。

#### 引用文献

- 梶谷光弘2003 「母里藩の医者大森不明堂三楽の生涯―出雲国への華岡流医術の伝播―」『山陰史談』第三十一号、四一―八六ページ
- 梶谷光弘2008 「第二章 華岡青洲門人大森泰輔／第三節 大森泰輔の生い立ち、第四節 華岡家「合水堂」への入門、第五節 華岡家「春林軒」における医学修業、第六節 帰国後の医療活動、第七節 画人としての大森泰輔」島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編『華岡流医術の世界―華岡青洲とその門人たちの軌跡―』、ワン・ライン、四六一―二二六ページ

田中則雄2008a「第二章 華岡青洲門人大森泰輔／第八節 文化人としての大森泰輔」島根大学附属図書館医学分館大森文庫出版編集委員会編『華岡流医師の世界―華岡青洲とその門人たちの軌跡―』、ワン・ライン、一二七―一三六ページ

田中則雄2008b「道話雑記 天・地」(C D、二〇〇七年度島根大学萌芽研究プロジェクト成果物)

# Omori Taisuke's philosophy of human nature and learning

TANAKA Norio

(Shimane University, Faculty of Law and Literature)

Keywords : Shingaku, Neo-Confucianism, HANAOKA Seishu

## [ Abstract ]

OMORI Taisuke (1771-1857), physician and educator in Izumo, celebrated human dignity in his poems. He attained such humanistic attitudes toward learning based on Neo-Confucianism ("Heart Learning").

出雲の医家大森泰輔の人間観と学問観  
(田中則雄)